

■ 神奈川県立図書館

横浜 〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋 3-27-1 TEL (045)481-5661(代表)
平塚 〒259-1293 平塚市土屋 2946 TEL (0463)59-4111(代表)
<http://www.kanagawa-u.ac.jp/lib/index.html>

新しい図書館に 必要なもの

図書館長 的場 昭弘

私は図書館という場所が好きだ。だから図書館運営委員という申し入れも喜んで引き受けたし、ましてや図書館長という地位は、待望の職であったと言ってもいい。なぜ図書館が好きかといえば、最初の職場と関係している。

一橋大学社会科学古典資料センターの助手となったのは、1984年ちょうど20年前のことである。助手という名前があるものの、図書館員そのものであった。オーストリアの経済学者カール・メンガーの蔵書を中心として形成された西洋古版本は、7万冊にも上っていた。きらめくばかりの珍書に囲まれた世界は、中世の修道院を思わせた。私の研究分野は19世紀の社会史であり、私にとっては天国であった。閉館し、他の職員が帰った後、書庫を散策するのは至上の喜びであった。時価数十億円の至宝、いや貴重な文献に囲まれている至福のときは、何事にも代えられないひと時であった。

研究のために世界中の図書館、古文書館をまわった。大英図書館、アメリカ議会図書館、フランス国立図書館から、小さな町の公立図書館。どこでも史料や書物といると安らぎであった。なぜかという本と本の匂いはどこでも同じだからである。

1995年から一年間アムステルダム国际社会史国際研究所に滞在させてもらったが、閲覧室に部屋をもらい、好きなだけ本を借りて朝から夕方まで毎日読書三昧であった。今館長室で文章を書いているが、ここもまた快適である。本に囲まれた生活は、私のような本好きにとってはたまらない魅力なのである。

とはいえ、図書館をめぐる状況はこうした浮世離れした話をたちまち打ち壊してしまうほど激変

している。従来の図書や雑誌を中心とした図書館から、オーディオやビデオ、インターネットまでを含む総合図書館へと変貌しているからである。図書館を情報センターやメディアセンターと呼ぶのは今では普通となってきている。図書というハードから、情報というソフトに変化したのである。

昔は本を形として読んでいた。まず製本の美しさを眺め、印刷の匂いをかぎ、それからおもむろに読むのである。今では、形も匂いも出てこない。物としての形を失ったことによって、書物は情報であるということが明確になったのである。

変な言い方だが、端末さえあれば世界のあらゆる書物や雑誌を見られる時代がくるかもしれない。その意味では書物としての世界はこれから急速に減少していくにちがいない。とはいえ、図書館がなくなるのかといたら、そうではない。図書館という空間は、書物を読むという儀式を正当化してくれる聖なる場でもある。仲間と触れ合ったり、情報を交換したりするのは、実は図書館という空間であり、学ぶという気持ちを高めてくれるのも図書館の空間である。

蔦の絡まる煉瓦造りの図書館で読む本は格別である。私は慶応義塾の出身だが、三田の旧図書館の煉瓦造りの建物で本を読むと冷厳な気持ちがしたものである。また友人が何を読んでいるのかも気になり、よく覗いた。書物の形を見ただけでそれが古典なのか、新書なのかすぐにわかった。無理をして難しそうな洋書をこれ見よがしに見せたこともある。本も図書館も、コミュニケーション手段であったのかもしれない。

図書館の情報センター化はたいへん結構なことなのだが、情報センター化された図書館はコミュニケーションという点においてはまだまだ力になりえていない気がする。場としていかに軽薄なのである。学問とは、畢竟人間を見ることであるとすれば、コミュニケーションを欠く研究も図書館もありえないはずだ。だから新しい図書館は、機械化された無機物の空間ではなく、人と人とのコミュニケーションの場とならねばならないはずである。 (経済学部教授・社会思想史)

『心的外傷と回復』

ジュディス・L・ハーマン著 中井 久夫 訳 みすず書房
B490-1448 493.7-10

関 口 昌 秀

多くの学生が心理学関係の授業科目を受講しているときく。心理学への関心のひとつの中心が「私というもの」への関心である以上、今日の青年にとって「私」が一大関心事であることはまちがいない。この事態に直面して、昔の学生は社会へと関心が広がっていたのに、今の学生は自分の内に関心が閉じてしまった、と批判する声も一方から聞こえてくる。しかし、このような批判は一面的であるように思う。

外なる世界への関心は、つねに、内なる世界への関心と裏表のようにあるものだからである。社会と私とは、いつの時代でも、青年の中心課題である。今の学生がイラク問題に無関心でいられないのと同じように、昔の学生も「私というもの」に無関心でいられたわけではない。その証拠に、フロイトの『精神分析学入門』（中公文庫）や『夢判断』（新潮文庫）などがよく読まれた。今でもフロイトは悪くない。何とんでも、フロイトは精神分析の創始者だし、それにこの2冊は下手な入門書より断然分り易く、なおかつ面白い。

昔と今を比較するなら、関心の内外より、癒しの視点がよいのではなからうか。癒しは現代のキーワードである。昔ならありふれた人間関係や自然とのふれ合いの中で、自然に癒されたが、今では癒しは特別に探し求めなければ得られない希少価値をもつものになってしまった。

癒しの時代の学生には、ハーマンの『心的外傷と回復』をすすめたい。この本は、心的外傷（こころのきず）とその治療にかんして、現在もっとも代表的な著作とされている。訳者中井久夫は阪神・淡路大震災の後に発足した「こころのケア・センター」の責任者であり、震災によるPTSD（心的外傷後ストレス障害）の治療に役立てようとこの本を翻訳した。「心的外傷」とは「トラウマ」の訳語だが、現在なら『トラウマと回復』と

いう表題になったかもしれない。わずか10年足らずの間に、トラウマという言葉はそれほど一般にも普及した。たしかに、癒しの時代といわれるわけである。

この本の読者対象は心的外傷の専門家だが、米国では、一般の知的公衆から、心的外傷を負った帰還兵や女性の性犯罪被害者にも読まれているという。日本でも事情は似ているかもしれない。教育学の分野では、竹内常一がハーマンの議論を大きく取り上げた。治療者は技術的には中立でなければならないが、道徳的立場としては断固、犠牲者である患者に連帯しなければならない、というハーマンの治療関係原則を参照しつつ、「教師は子どもに対して心理的に中立であっても、道徳的にまちがったことはまちがいでであると指摘する道徳的非中立性を貫かなければならない」、と竹内は主張した（『教育を変える』桜井書店）。

本文だけで400ページ近くある部厚い本なので読み通すことはむずかしいが、難しさはそれ以外にもある。中井は、翻訳の途中で、精神医学的考察が次第に悪夢的な連想に移行し、翻訳の筆が徐々に遅くなったという。わたしも読みすすむうち気分が暗くなり、途中で中断した。じつは、このようなことは、この種の本を勉強する過程でしばしば体験することで、それは避けられないことでもあるという。

だから、この本を読めばすぐ癒されると言うつもりはない。外傷からの回復段階を扱った後半部あたりなら、あるいは癒しに適しているといえるのかもしれない。しかし、ほんとの癒しのためには、前半部の外傷体験症例も読んで、一時陰鬱な気分が落ち込むことも必要であり、そういう経過をとってのちはじめて人は外傷から立ち直ることができるのかもしれない。

（経営学部教授・教育学）

『アメリカの秘密 ハリウッド政治映画を読む』

副島 隆彦 著 メディアワークス B778-582

加藤 宏 紀

本書は、「政治映画」と呼ばれるジャンルのハリウッド映画約200本の解説書である。そして、その解説を通して、ある「秘密」を暴露しようという意図のもと書かれたものである。「秘密」には大きく三つある。一つは、アメリカの政治思想の分類とその対立軸である。二つ目は、アメリカ(欧米)白人社会の人種・宗教の対立問題である。三つ目は、世界(アメリカ)から見た日本像である。

日本人はアメリカに共和党(保守思想)と民主党(リベラル思想)の二大政党があることは知っているかもしれない。しかし、本書のp.64の表に示されたように、それぞれの中がさらに細かく分かれていて、さらに「グローバリスト」と呼ばれる「アメリカが世界を管理する」という思想の持ち主が大きく共和党を侵食しているという事実を知らない。(私は副島隆彦の著作を読んでではじめて知った。)映画の解説書である本書が、なぜアメリカの政治思想について言及できるかという、実は、副島隆彦の主著である『現代アメリカ政治思想の大研究』(筑摩書房)(現在は、『世界覇権国アメリカを動かす政治家と知識人』(講談社 文庫))が下敷きになっているからである。言い換えると、本書は、『現代アメリカ政治思想の大研究』で提示された、アメリカ社会を理解するための枠組みを、ハリウッドの「政治映画」の解説を通して、日本の大衆に向けて、著したものである。その甲斐あってか、最近では「ネオコン」のように副島隆彦がはじめて日本に紹介した語がメディアで使われるようになった。

また、本書ではアメリカの政治思想だけでなく、アメリカ白人社会に横たわる人種・宗教上の対立もアメリカ社会を理解するために不可欠の要素として取り込まれている。すなわち、ワスプがドイツ系や北欧系とともに上層を形成し、それと対立・対決する形で、イタリア系、アイルランド系、ポー

ランド系などの下層白人がまとまっている。そして、その人種上の対立は、そのまま「プロテスタント」vs「カトリック」という宗教上の対立とかわりをもつ。こうした白人社会を引き裂く断層も日本人には「秘密」として、いまだ広く知られていない。

本書における、三つ目の重要な視点は、映画『猿の惑星』の解説を通してなされている、「日本は『猿の惑星』である」という副島隆彦の指摘である。つまり、アメリカは『猿の惑星』に日本社会を投影しているということである。こうした事実もまた、日本の一般大衆には「秘密」として知らされない。

実は、このような「秘密」は、アメリカ人にしてみると、当たり前の事実で、「秘密」でもなんでもない。それらが「秘密」たりえているのは、それらの事実を知らせまいとする勢力があるからである。副島隆彦は上の三つの「秘密」を暴くと同時に、本書を通じて、そうした日本国内外の勢力を徹底的に批判する。そして、最後に次のように締めくくる。

<日本は厳しい情報統制国家である。「言論の自由」が守られた自由な国だ、などというのは嘘である。しかし、実は「自由の国」アメリカも思想統制国家である。「人権や自由やヒューマニズム」を声高に唱えている者たちこそが、言論弾圧を行っている危ない国家である。「もしかしたら、自分の頭(思考力)がコントロールされているのではないか？」と不断に疑うことが必要である。(p.290)>

果たして、「秘密」は暴かれるべきか、それとも「秘密」は「秘密」のままよいのだろうか。

(外国語学部専任講師・中国語)

モンタヌス『オランダ東インド会社遣日使節紀行』 オランダ語訳初版について

本学図書館では、最近オランダ人アルノルドウス・モンタヌス (Montanus, Arnoldus 1625-1683) の著書『オランダ東インド会社遣日使節紀行』Gedenkwaardige Gesantschappen der Oost-Indische Maatschapy aan de Keisern van Japan, 1669. 正しくは、『連合ネーデルランドにある東インド会社の、日本歴代皇帝のもとへの記憶すべき使節の数々の報告』のオランダ語訳初版を貴重書庫の一冊に加えた。モンタヌスは、1660年にフランス語で Ambassades mémorrables de la Compagnie des Indes Orientales des Provinces Unies, vers les emperours du Japon. を著しているのが、オランダ語訳初版と言わざるを得ないのはこの意味である。当時のオランダは、1620年代にはスペインと戦争、1648年にミュンスター条約、ウエストファリア条約を経て改革派 (カルヴァン派) のオランダ共和国が成立した時代であり、またその後イギリスとフランスからの挑戦を受ける時代でもあった。『本書』の出版の2年前、1667年5月にオランダとイギリスが戦争していた時に、フランスのルイ14世もすきあらばとオランダに触手を伸ばそうとしていた。国際政治が混沌としていた時代下での書籍商人で彫版工のヤコブ・ヴァン・ムールス (Meurs, Jacob Van 1619-1680) による出版だった。金井圓著『江戸西洋事情』(新人物往来社1988年) には「オランダ語訳は1669年に二度、1670年、1680年の四度刷り」(同書109頁) 出されたという指摘があるので、我々ののは、1669年版のいずれかであろうか。もっともモンタヌス『本書』には「出島」の挿図があって、ヨーロッパ人が描いたものでは一番古いとこれまでいわれてきた。マーティ・フォーラーは、「われらの出島 オランダ人による歴史的考察」のなかで、ヨハネス・フィンケボーン (Johanes Vinkeboons, 1617-1670) の蜜図と称された116枚の地図の一枚だろうと指摘しているので、それと整合すれば、どちらが早く刷られ

たのかがある程度想定できそうである。

これで、図書館には、1669年のドイツ語訳初版以外の英語訳初版 (1670年)、フランス語訳初版 (1680年) に加えて世界に現存している各国語訳初版4冊の内3冊を所蔵することになった。この本



オランダ語訳初版1669年口絵がヨーロッパで歓迎され、よく読まれたのは、江戸幕府による鎖国令が1639年に貫徹された以降、全く情報が入らなくなり、この本が唯一の日本についての情報源になったからである (この詳細については、「モンタヌスのオランダ東インド会社遣日使節紀行」『図書館便り』2001・4・No.104と「オランダ東インド会社遣日使節紀行の銅版画」『神奈川大学評論』2000・第36号、他にも触れている)。かつて、平成12年に平塚市美術館で展示を行う際に、私はモンタヌスのこの著書にある折込の銅版画挿図類の『対照表』を作成した。その結果、オランダ語訳初版25枚、ドイツ語訳初版24枚、英語訳初版25枚、フランス語訳初版26枚であること、またその挿図類が完全に同じでないことを比較する上で、この『対照表』は役立った。装丁はFull Vellum (全装丁が子羊の上等な皮) で、これからの保存に耐える利点がある。形態は、33×23cm、タイトルはred and black、口絵には、江戸城の謁見の場、左に日本人、やや低め右にヨーロッパ人が描写されている。中央上段には日本人に愛好的な女性の描写がある。その衣装には百合 (フランスを象徴する) の模様があって国内の大学、研究機関で所蔵しているオランダ語訳初版と同じものである。(情報サービス課・吉田 隆)

1983年、神奈川大学図書館は、全国に先駆けて地域開放を始めた。当初は、神奈川県内に住む社会人を対象にしている、具体的な研究テーマを持つ人に限るなど利用条件は、かなり厳しいものであった。とは言え、「生涯学習」の流れが徐々にその形を見せ始める時期で、「大学の社会的貢献」という言葉がまだ一般的に流布していない時のその名乗りであった。

神奈川大学は、平塚市と、湘南ひらつかキャンパス開校以来、「交流事業」を進めてきた。今年3月19日、その交流事業の一環として、図書館の相互協力協定の覚書を交わした。それにより、神奈川大学図書館は、5月1日から平塚市の中央・南・北・西の4図書館との間で、図書相互貸借をはじめ、文献複写、印刷物等情報の交換、文化活動の共同開催等の協力関係を進めることになった。

昨今、社会全体のIT化が「社会の知識化」現象を推し進めている。その状況の中で市民は、自律的な生活をしようと思えば、そこに必要となる情報を自ら得る努力をしなければならない。知識体系の更新を使命とする大学にとっては、市民が情報を得ようとする場合、その機会を提供することが社会的貢献として重要な活動となって来た。

平塚市民は、その人の住む近くの上記の図書館を通じて神奈川大学図書館の、法律、経済、経営、外国語学、理学、工学の6学部15学科の専門分野を反映する蔵書(100万冊)が利用でき、しかも3日以内にその人の手元に届けられる。また、各大学・研究所で生み出される最新知識を満載する新着雑誌(1700種)の記事を直接手に取って閲覧できるだけではなく、図書館を通して複写物を取り寄せることもできるようになった。

一方、神奈川大学の学生にとっては、平塚市4図書館が利用可能になることによって、資料群と学問的関心を裏付けるチャンスの広がりが得られることになった。4館合せて、約70万冊の蔵書を誇り、各館が個性化を図り、それに応じて資料の収集がなされている。

中央図書館には、地域に関係する資料が充実している。地域の動向を伝える、神奈川県や平塚市の行政・経済・社会に関する議会議事録、報告書、統計書、住宅地図等が集められる。

郷土の文化人、維新期の民権運動の活躍を伝える、歴史・民俗・文学関係については、そうした資料をもとにした地域研究が発見されている。また、個人文庫も多く、鹿島孝二文庫、岩田文庫、志澤文庫、白須文庫、柿沢篤太郎文庫、水島チサ文庫等の所蔵は、興味深い。

他の3図書館、北図書館では、農業・園芸関係の資料を集め、西図書館では、歴史書であり、南図書館では、海や船をテーマに資料を集めている。

以上の4館が窓口となり、神奈川県立図書館を核にした県内市町村図書館(79館)のネットワークに接触できると、各地域で保存される蔵書の中に未知な資料を発見することになるかも知れない。

「覚書」の完成には、それほどの時間を要しなかった。「交流事業」の質の深まりと共に双方が時を得て調印に漕ぎ着けた。時を移さず、共生の活動が動き始めた。真に、市民と学生のニーズに応えて行くためには、双方の図書館員のネットワークの良さこそが期待されている。(平塚市図書館利用の詳細については、横浜図書館・平塚図書館の窓口にお問い合わせください。)

(平塚図書館課長・萩原富夫)

平塚市4図書館との 相互協力について

「Web of Science バージョンアップ講習会」開催される

去る6月10日(木)、「図書館オンラインデータベースセミナー」の一環として、「Web of Scienceバージョンアップ講習会」が1号館308会議室において開催されました。「Web of Science」とは、自然科学・社会科学・人文科学の各分野の主要約8,600以上の厳選された学術雑誌を収録し、引用文献情報の搭載を最大の特徴とした文献データベースです。今回は、このデータベースを教職員・大学院生・学部生等の利用者に、より深く認識していただくことと利用拡大を主な目的として、導入経過から実際の利用方法、バージョンアップ情報などについての講演・講習会を実施しました。

まず、的場図書館長から開会の挨拶があり、次に西久保工学部長から導入経過等について説明がありました。続いて「Web of Science」提供元のトムソンサイエンティフィック社アジアパシフィック担当副社長から総合的・全体的活用について話がありました。

引き続き講習会に入り「Web of Science利用のメリット」、「Web of Scienceのバージョンアップ情報」について、パワーポイントや実際にデータベースにアクセスしながら解説がありました。質疑応答の後「体験コーナー」に移り、受講者自らがデータベースにアクセスして「Web of Science」を体験しました。

今回の講習会は「申込制」としましたが、当日の申し込みも多数あり、予想を上回る90名を超える参加者がありました。会場の会議室はほぼ満員になり、データベースへの関心の高さが感じられ、活気あふれるものとなりました。これを機会に「Web of Science」は言うまでもなく、他のオンラインデータベースのさらなる活用を期待します。

なお「Web of Science」のほか以下の「図書館オンラインデータベースセミナー」を実施しました。
<横浜>

5月12日(水) Lexis-Nexis (レクシスネクシス)
* 米国などの法律・判例、ニュー



ス、雑誌、ビジネス情報。

5月19日(水) OCLC eBook
(OCLC イーブック)
* 法学洋書158タイトルの電子
図書。

OCLC First Search
(OCLC ファーストサーチ)
* 世界の図書、雑誌・新聞記事
等の情報。

5月25日(火) EBSCO host (エブスコホスト)
* 人文・社会科学系中心学術雑誌の全文・抄録データベース。

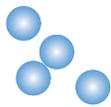
6月4日(金) JDream (科学技術文献情報) /
Web OYA-bunko(大宅壮一文庫
雑誌記事検索) / 「聞蔵」(朝日新聞
記事等) / Japan Knowledge
(大日本百科全書等)ほか国内版
データベース。

各日とも1日3回実施。
(10:30 ~ 13:10 ~ 14:45 ~)

<平塚>

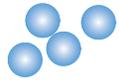
6月15日(火) JDream
6月30日(水) EBSCO host

各日とも1日2回実施。
(13:30 ~ 15:30 ~)



横浜図書館2階に

「情報リテラシーセミナー室」開設



図書館では昨年、新システム（iLiswave）移行に伴いオフコンからWindows環境となり、ホームページもリニューアルされ、データベース検索の機能が格段にアップいたしました。従来からの図書等資料の検索に加え、高度情報化社会の著しい進展の中で、図書館ホームページからさまざまな電子データ、電子ジャーナル、データベースが利用できるようになりました。この電子情報を使いこなす能力を養うための利用ガイダンスが重要な課題となり、情報リテラシー教育が不可欠となっております。

2003年度の図書館基本方針においても、電子ジャーナルやデータベースの拡充とともに情報リテラシー教育の実施を謳い、セミナー室の開設に向けて取り組んできました。その結果、本年6月にパソコン15台を設置した情報リテラシーセミナー室が開設する運びとなりました。

今までは、パワーポイント等を使用した片側方向のみの利用ガイダンスを行ってきましたが、図書館OPAC(蔵書検索)や各種データベース検索のガイダンスにパソコンを使用し、図書館員と受講者の双方向で行う、よりリアリティ豊かな利用ガイダンスを行うことが可能となりました。

今後は、新入生・初心者向けによりわかりやすいOPAC(蔵書検索)の利用ガイダンスを、卒業年次・大学院生向けにはテーマを絞りこんで、専門分野に即した電子ジャーナルやデータベースの講習会を開催していきます。更に高校生の一日図書館員体験コースの実習用として、またオープンキャンパスの情報検索の体験コーナーとしても、このセミナー室を活用していく予定です。

2004年度 第1回 図書館上映会と講演

原村政樹監督「海女のリャンさん」開催



- 日 時 2004年5月27日(木)
- 上映作品 『海女のリャンさん』
- 演 題 「私とリャンさんの5年間」

今回の作品は戦前に濟州島から日本に渡り、現在大阪で暮らしている在日朝鮮人リャン・イーホン(梁義憲)さんの三年間の映像記録である。リャンさんは、現在87歳、7人の子どもを抱え、家計を支えるために70歳近くまで鹿児島から対馬、四国、三重、静岡の海に潜り続けた人である。朝鮮通信使の研究者、辛基秀さんがカメラマンの金性鶴さんと共に当時のリャンさんの二年間の記録を撮った16ミリの映画フィルムが<幻のフィルム>として残されていた。そこからリャンさんが潜水している様子も知ることが出来る。



原村監督の講演でのお話だと「在日朝鮮人の女性史・生活史」を知る上で大変貴重な映像資料だと言う。今から35年前のこの<幻のフィルム>とリャンさんとの3年間の映像記録を、監督は再構成、編集して『海女のリャンさん』を完成した。映画には、リャンさんの故郷・韓国濟州島への53年ぶりの訪問と北朝鮮訪問が映し出されている。そこには、体制の異なるそれぞれの国で生活を営んでいる親と子供の<絆>という普遍的な<テーマ>がある。当日、参加者73名、多くが感動を得た上映会のひと時であった。

図書館展示コーナー

『ヨーロッパを身近に感じる I 【イギリス】』

～横浜・明治初期に生きたイギリス人～

展示期間 7月1日～10月29日

『ヨーロッパを身近に感じる』シリーズ第一弾として、日本と同じ島国であり、歴史的に日本と深い関わり合いを持ってきた、【イギリス】を取り上げます。今回は西洋文明に触れ始めた幕末から明治初期の開港期をクローズアップし、西洋文明が入りこむ日本の窓となっていた横浜で西洋技術の導入に力を尽くし、活躍したイギリス人の【お雇い外国人】を紹介します。F.V. ディキンズ、R.H. ブラントン、エドモンド・モレル、H.S. パーマー、

チャールズ・ワグマンの5人です。

彼らの活躍・生活を少しでも知った上で、再び横浜市内を散策したら今までとは違ったドラマを感じ取れるかもしれません。また今回の展示では、貴重な資料である『ILLUSTRATED LONDON NEWS』や横浜絵葉書などもディスプレイします。明治初期の横浜における文明開化も感じていただけたら幸いです。是非一度ご鑑賞ください。



図書館の利用案内

1. 横浜図書館書庫の資料移転と再配置に伴う入庫中止と貸出停止について

横浜図書館の書庫は資料の増加により収容冊数を超え、大変利用しにくい状態が続いていましたが、このほど23号館書庫の書架が設置され、夏休み中に一部蔵書資料（雑誌）の移転を行うことになりました。移転する蔵書資料は和雑誌（310門320門400門500門を除く）と洋雑誌（400門500門を除く）です。この移転に伴い、図書館書庫の蔵書資料も再配置を行います。

作業に伴い次の期間、書庫内入庫中止と書庫内図書貸出停止になります。ただし、開架閲覧室の利用および開架図書の貸出は行います。ご迷惑をおかけしますが、ご協力をお願いします。

入庫中止期間：8月2日(月)～8月31日(火)

書庫内図書貸出停止期間：

8月9日(月)～8月31日(火)

2. 夏季長期貸出について

貸出期間：7月16日(金)～9月11日(土)

返却期限：9月27日(月)

3. 夏休み期間中の開館時間・休館について

横浜図書館

開館時間：9時30分～18時

休館日：日曜・祝日・館内整備日

(8月12日(木)～8月16日(月))

平塚図書室

開館時間：9時10分～16時50分

休館日：土曜・日曜・祝日・館内整備日

(8月7日(土)～8月15日(日))

書架から

たかむれいつえ

高群逸枝といえば、母系制、婚姻、恋愛史の研究に生涯をかけた、「火の国の女」といわれた歴史学者である。ここには、夫橋本憲三による四三年前の若い夫婦のエピソードをつづった書簡と、余白への逸枝による書き込みが紹介されている。あるとき、逸枝は恋愛論を書こうと家出をする。絶望した憲三は、あとを追いつき回る。手紙には、きわめて父権的であった憲三が、やがて妻の才能を認めるようになった夫の真情があふれている。高群逸枝は、『母系制の研究』『招婿婚の研究』『日本婚姻史恋愛論』など、女性史の巨大な研究を残している。夏、図書館では雑誌を中心に資料の大移動がはじまる。(K)